
窓から見える風景

ゆんた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓から見える風景

【Zコード】

Z8087Z

【作者名】

ゆんた

【あらすじ】

某日、僕は友人と一緒に電車に乗っていた。学校からの帰り道。間に漂う空気は何時もと同じで、ただなんとなく会話を重ねる。電車が駅に止まり、乗り降りする人々の波の中、中学校の時に同じクラスだった男子生徒と顔を合わす。ただそれだけの、なんでもない普通の話。

学校帰りの電車の中で友人と一人、移ろい往く景色にぼんやりと目を向けていた。

間に流れるのは他愛も無い話。今日は球技大会があつたから、運動不足の僕は全身が筋肉痛だつた。僕が「脚が張り裂けそうだ」と言つたら、友人も「俺もだ」と言つて笑つてくれた。結局のところ、お互に引きこもりが祟つたという話だ。僕も友人ももう少し運動しないと、近い将来に体の病気になるだろう。そう僕が言つたら、友人は「そんなことしたら心の病気になる」と言つて僕を笑わせた。電車が減速を始める。車内にマニュアル通りのアナウンスが流れる。誰も聞いていないのも何時もの事だ。そうして僅かな揺れと共に駅のホームに入つた。

停車した電車の扉が開く。海の水のように、出て行く人と入つて来る人が引いては寄せる。

出入り口とは逆のほうを向いていた僕は、背中から掛けられた声にびくつとした。

「よう」

声の方を見ると、瘦せぎすの顔に眼鏡を乗せた男子生徒が立つていた。

一瞬誰かと思い、傍らの友人をちらりと見たが、友人はそいつが誰だか分かつてゐるらしく、特に違和感の無い表情でそいつを見ていた。意味の無い焦燥心と共に「こいつは一体誰だったか」と本気で考えてようやく、中学校のときに一緒にクラスだった男子生徒だと記憶のピントが合つた。

確かに、工業系の専門学校に進んだ奴だ。友達は少なく、僕だけそれほど話したことがあるわけじゃない。こうして声を掛けられるほど仲が良かつた記憶は無いが、そいつもなんとなくそういう気分だったのだろう。懐かしさが先行して行動を取つてしまふことは

不思議なことでは無い。僕はそういう行動をしたことが無いけれど。
そいつはずかずかと僕と友人の間に割つて入つた。

なんとなく微妙な空氣　僕だけがそう感じているのかも知れない
　　の中、そいつは聞かれてもない自分の近況を話して、友人がそれに相槌を打つていた。今日したこと、期末テストのこと、進路のこと　そいつは学校で資格を取つたが就職せずに進学するらしい　僕も空氣に合わせて笑い、合いの手を入れたりした。

「なあ、大学どこに行くの？」

何でもない質問。それなのに僕は反発心を持った。言葉に詰まつていると電車が発進した。

「ハーバード」

僕の友人が言つた。僕とそいつは馬鹿にしたように笑つたが、そいつは三割くらい本気の表情で、ハーバードの魅力と、その結果将来どうなるか、ということを、僕たちに熱っぽく語つてくれた。こいつはそういう奴なのだ。その実、一体どれくらい本気で言つていることなのか、数年来の付き合いをもつてしても計り知れない部分がある。

「そりや無理だろ」

「馬鹿にすんな。俺は本気だ」

「いやいや、お前英語喋れんの？」

「英語が喋れないと死ぬような環境に置かれたら、誰だつて喋れるようになるだろ」

僕はクスリと笑つた。そりやそうだ。使えないと死ぬなら、誰だつて使えるようになるに違いない。アメリカで死んでいいのならば英語が話せるというのは道理である。

「で、お前は？」

僕に話を振つた。僕は適当に近くの大学の名前を挙げておいた。適当と言つても、僕は多分そこに進学することになるだろうから嘘ではない。だからこの適当は僕にとって適当だ。分相応と言えるかもしれない。

そいつは「ふうん」と対して興味も無いように言った。電車が減速を始めた。どうやら次の駅に着いたらしい。全く面白みの無い会話でも、こうしてグループで話していれば、時間の流れは早く感じるものなのか。もし一対一だったら大変だつただろうけど。

そいつはズボンの右ポケットから定期を出して「じゃあな」と言って電車を降りた。友人は手を振っていたが、僕は振らなかつた。と言うよりも、振るタイミングを逃した。まあいい、一度と会つことも無いだろう人間だから。

扉が閉まり、電車が発進する。あんな奴でも居なくなると、少しの間だけ会話の空白が目立つ。

「僕さ」

「ん？」

「結局、あいつの名前、思い出せなかつたんだよね。おかしいよね。同じ学校に通つていて、毎日顔を見ていた筈なのに、あいつの顔の特徴とか、どこの高校に行つたのかとか、そういうことしか思い出せないんだ。……なあ、あいつの名前、なんていつたつけ？」

友人はそいつの渾名を言つた。四文字の、カタカナ風味の渾名。僕は「ああ、思い出した」と言つて笑つたが、分かつたのはその二ツクネームだけで、本名はやっぱり思い出せなかつた。

そういうこともあるのだろつ。

移り往く時の中、まるで電車の窓から見える景色みたいに、見えるものは息を付く暇も無く変わっていく。それを心に留めようとしなければ、消えていってしまうのは仕方が無いのかもしれない。僕にとつてのあいつは、夏に行つた海の綺麗さとか、皆で行つた修学旅行とか、去年やつたテレビゲームの面白さとか、そういうポジションに居た奴だつたというだけの話。

電車が止まる。僕と友人はホームに出た。

こうして並んで歩くこいつも、高校を卒業したら連絡が取り辛くなるだろつ。そうしていつか、電車で会つたあいつのようこ、名前すら思い出せない日が来るのかもしれない。

僕は溜息を吐いた。同時に隣の友人も溜息を吐いた。僕らは顔を見合させて苦笑いをした。

「この筋肉痛、絶対明日まで響くよな」

「ああ、間違いない」

いつか忘れてしまうなら、せめてこの感傷を焼き付けよう。

僕はそう思つて前を向いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8087n/>

窓から見える風景

2011年4月29日18時26分発行